

## 環境計画「5つの柱」に関する取り組み

# 5.環境に関するコミュニケーションの推進

京都大学では環境に関する講座やイベントを行い、学内構成員や市民の方々に広く公開し、参加していただいています。その一例として、京都大学総合博物館での活動を紹介します。

## 博物館でエコ

総合博物館  
教授 大野 照文

京都大学総合博物館は、260万点の学術標本資料を擁する、日本有数の大学博物館で、平成9年に発足しました。建物は、旧文学部博物館に自然史を中心とした展示を行う南棟を連結する形で建設されています。南棟の建設にあたっては、省エネについて多少の配慮を行いました。屋根に30KWの太陽光発電装置を設置、晴天の日には館の電力の5%近くをまかっています。

さて、総合博物館の展示には地球環境や生態系について考えるためのヒントがいくつもいくつも隠してあります。例えば、熱帯雨林のジオラマのハシナガクモカリドリとマツグミ科の花の共生。鳥は花から蜜をもらい、その代わりに花粉を運ぶのです。鳥が蜜を吸いやすいように、花は止まり木まで用意しています。鳥のクチバシのそりと花のカーブがぴったりと一致、もしこの花が無くなったなら、この鳥は他の種類の花から蜜を取ることは難しくなるでしょう。生き物のネットワークが壊れることの意味がはっきり見て取れるようになっていきます。

総合博物館で年2回行われる企画展の中には、環境関連のテーマも含まれます。平成16年開催の企画展「森と里と海のつながり-京大フィールド研の挑戦-」では、豊かな漁場の後背地に豊かな植生が必要であることが、「魚付き林」の例で示されました。環境問題はヒトだけが原因ではありません。太陽でプロミネンスが大規模に噴出すると、高エネルギー粒子が数日かけて地球に届き、宇宙飛行士の被曝や電力供給網のダウンなどが起こります。企画展「京の宇宙学」では、被害を予測する宇宙天気予報の研究についても紹介されています。また、1000年後のエネルギー問題解決を見据えた研究も紹介しています。本学理事の松本紘教授は、地球を回る静止軌道に巨大な太陽光発電装置を置き、発電した電気をマイクロ波で地球へ送る宇宙発電所を構想、実現可能であることを一連の

実験で示しました。その実験装置も「京の宇宙学」の入り口に展示されました。

また本学では、使い捨てのレジ袋削減の活動も行っています。そこで、今夏博物館で開催の夏休み学習教室で、子どもたちに無地の木綿のバッグに特殊なクレヨンを使って絵を描いてもらい、世界に一つしかないオリジナルマイバッグをつくるプログラムを企画しました。子どもたちが、自分たちの創造性に気づいて歓声を上げながら、自然やエコとは何かにも想像を巡らせて眼を輝かせる光景がすでに臉に浮かびます。

総合博物館では、生態系の研究から最先端技術まで、京都大学の優れた研究の現状や未来について紹介し、また様々なイベントを企画し、今後も京大と市民の皆さんと一緒に、私たちヒトと地球・宇宙環境のつながりや未来のあるべき姿を考える場を提供してゆきたいと考えています。



ハシナガクモカリドリとマツグミ科の花の共生